

～小さな発見が生まれる～ 下線部は小さな発見を豊かな経験につなぐ教師の援助

1日目：ヤゴを捕まえる

5月中旬、A児がわくわく池でギンヤンマのヤゴを捕まえた。A児の隣で見ていたB児が、「Aくんがヤゴを捕まえた！部屋で飼おうよ！」と教師に言いに来た。A児はヤゴを見て、「飼いたいなあ。」とつぶやいていた。教師が「みんなに相談してみよう。」と声を掛けると、A児は「そうしよう！」と元気に返事をした。

降園前の学級活動で、A児がヤゴを捕まえたことや学級で育てたがっていることを教師が知らせると、他の幼児たちはA児に賛成した。自分たちで世話をする気持ちをもてるよう、教師が「ヤゴってどうやって育てるんだろう？」と投げ掛けると、幼児は「分からない。」「図鑑で調べてみる？」と考え始めた。幼児が自分たちで世話をする気持ちをもてるよう、「先生も調べてみるから、みんなも家で調べてみてね。」と話した。

【小さな発見】

- ・これまであまりヤゴを捕まえたことはなかったため、捕まえることができた喜びを強く感じた。
- ・ヤゴがトンボになるところを見たという好奇心をもった。

【A児の豊かな経験】

- ・自分で捕まえたヤゴに愛着をもち、家庭で飼い方を調べてきた。調べる中で、自分なりにどうすべきか考えた。

～豊かな経験へ～経験の深まりと経験の広がり

2日後：池に帰すことを決める

A児は家庭で調べてきたことを「池に帰してあげた方が、ヤゴちゃんはうれしいのかも。」と教師に話し始めた。教師は「みんなにも教えてあげよう。」と伝え、朝の集まりでA児からヤゴの飼い方を全体に知らせる機会をつくった。A児が「水道の水だと苦しいみたい。」「生きた餌しか食べないんだって。」と話すのを他の幼児も真剣に聞いていた。C児は「オタマジャクシをあげるのはいそがしいよね。」と残念そうな表情で言い、池に帰すということで意見が一致した。

【豊かな経験】

- ・A児の考えを共有できる機会をつくったことで、他の幼児も真剣に話を聞き、A児の考えを受け止め、それぞれが自分なりにどうすべきか考えた。
- ・ヤゴとオタマジャクシ、双方のことを考え悩んだ。
- ・互いの考えを伝え合ったことで、より深く考えたり悩んだりした。
- ・生餌以外食べないという問題を共有し、図鑑に載っていた餌以外にヤゴが食べるものがないか、自分たちで探った。

翌日：期限を決めて飼う

教師がヤゴの様子を見ると、羽の色が変わってきていた。そこで、図鑑の中で羽化の様子が載っているページを開いて水槽の隣に置いておくと、登園してきたB児が早速図鑑を見て「もうすぐトンボになるかもしれない！」と興奮気味に話し始めた。それを聞いた他の幼児もヤゴを観察していた。教師は再度学級全体で話し合う機会を設け、本当にこのまま池に帰してもよいか投げ掛けた。A児は「オタマジャクシをあげるのはいそがしいよね。」、B児は「オタマジャクシをあげないと、ヤゴがかわいそう。」と言い、他の幼児も迷っている様子だった。そこで教師は、いつまでヤゴを育てるか期間を決めることを提案した。それを受けC児が「決めた日までにトンボにならなかったら池に帰そう。」と言うと、他の幼児も納得した。さらに、生餌以外に、落ち葉や池の藻などヤゴが食べそうなものを探すが見られた。教師は、幼児が自分たちなりに考えたり悩んだりする姿を大切にしたいと考え、生餌以外の食べ物を探究する幼児の姿を見守っていた。その一方で、ヤゴが途中で死んでしまわないよう、降園後にこっそりオタマジャクシを水槽に入れるようにしていた。



翌週：本当の気持ちは……

学級で決めた期限を迎えたが、ヤゴは羽化しなかった。話し合っただけで期限を設けたが、幼児は残念そうだった。そこで教師は、矛盾した感情をもつことや本当の気持ちを伝えてよいことを伝えるために、「実は先生、生きた餌をあげるのはいそがしいよねっていう気持ちはあるんだけど、トンボになるところを見たいっていう気持ちもあるんだ。」と話した。すると幼児の表情が明るくなり、「実は僕も。」と次々に言い始めた。「生きた餌をあげるのはいそがしいよねっていう気持ちと、トンボになるところを見たいっていう気持ち、どっちの方が大きい？」と投げ掛けると、ほとんどの幼児がトンボになるところを見たいと言った。また「オタマジャクシを何匹もあげるのはいそがしいよね、1日何匹で決めよう。」という意見が出ると、A児も納得した。

【豊かな経験】

- ・自分の中の相反する感情や友達との考えとの違いなどに気付き、答えは一つでないと感じた。
- ・気持ちを伝え合ったことで、皆でよりよい方法を考え、試すことになった。

その後

学級の皆が羽化することを楽しみにして、毎日期待感をもって登園するようになった。登園後すぐにヤゴの様子を見るのが幼児の日課になり、「かわいいね。」と声を掛けたり絵に描いたりして、学級全体でヤゴの話題を共有し、愛着をもって育てていた。園庭に出るときには必ず水槽も持って行き、水槽をきれいにしてから遊び始めることが習慣となっていた。

しかし、約1か月後、ヤゴは羽化することなく死んでしまった。池の近くに埋め全員で別れを告げると、幼児は「どうして死んじゃったんだろう。」「水が汚れちゃったのかな。」と悲しんだ。教師はなぜヤゴが死んでしまったか幼児が自分なりに考える姿を見守り、「みんなに育ててもらえて、ヤゴちゃんは嬉しかったと思うよ。」と伝えた。幼児は「そうだね。」「お世話頑張ったもんね。」と言っていた。

【豊かな経験】

- ・教師主導でなく学級全体の幼児が飼い方を考えたことで、皆の問題として共有され、ヤゴへの愛着が高まった。絵に描いたり、幼児自らが大切に世話をしたりするようになった。

【豊かな経験】

- ・一生懸命世話したヤゴが死んでしまい、全体で悲しい気持ちを共有した。死んでしまった理由をそれぞれの幼児が自分なりに考えた。

## ～豊かな経験へ～経験の広がり



### ヤゴへの愛着が遊びにつながる

ヤゴを育てているときから、幼児は世話をするだけでなくカラーポリやビニールテープ、緩衝材などを使ってトンボを作ることを楽しんでた。友達と見せ合ったり飛ばしてみたりして、遊びに取り入れる姿が見られた。

### 学年末の生活発表会でもヤゴのことを思い出す

ヤゴは、捕まえてから約1か月後に死んでしまったが、その後も「ヤゴちゃん、天国に行けたかな。」とつぶやきながらヤゴの絵を描いたり、池でヤゴを見付けると自分たちが育てていたヤゴを思い出したりする姿が見られた。2月の生活発表会に向けて劇を作っていく活動の中で1年間の振り返ったところ、劇の中にトンボを登場させることになった。



### 【豊かな経験】

- ・ヤゴに愛着をもち遊びに取り入れられたり、その後も思い出して懐かしんだり、劇に取り入れて楽しんだりした。

### 【幼児の小さな発見を豊かな経験につなぐ過程で必要な教師の援助】

- 教師が幼児の強い思いを受け止めたり、他の幼児に考えを受け止められる機会を作ったりすることで、幼児は自信をもつ。
  - ・A児の「ヤゴを育てたい」という気持ちを教師が受け止め、他の幼児に知らせる機会を設けたことで、ヤゴの話題が学級全体に共有された。また、A児が調べたことを他の幼児に知らせ、友達に考えを受け止められたことで、A児の自信につながっていった。
- 幼児自身が考えたり悩んだりする機会を教師が作り支えることで幼児の生き物への愛着が生まれ、その過程が豊かな経験となる。
  - ・教師が一方向的にヤゴの育て方を知らせるのではなく、幼児が自分で調べたり考えたりできるようにしたことで、ヤゴにとってよい環境は何かということそれぞれの幼児が主体的に考え、葛藤するという豊かな経験につながった。また、ヤゴのために悩んだり話し合ったり、世話をしたりしてきたことが、幼児の自信や生き物を大切にすることを大切にすることが、幼児一人ひとりの豊かな経験となった。
  - ・学級全体でヤゴのために悩み、考える機会が途中で失われないように、幼児の降園後に教師がオタマジャクシを水槽に入れるようにしていた。
- 悩んでいる幼児の姿を認め、教師自身の気持ちも知らせることで、幼児が本当の気持ちを出せるようになる。
  - ・話し合いを通して、「オタマジャクシを食べさせるのはかわいそう。」「ヤゴが羽化するところを見たい。」という2つの気持ちの間で葛藤する幼児の姿が見られた。また、教師自身もどうすべきか悩んでいた。教師の気持ちを知らせたことで、それまで言葉にはしていなかった幼児も自分の気持ちを言葉で表す姿につながり、「答えは一つでない。」ということを幼児自身が対話的に実感した。
- 思うようにならない経験も、そこに至るまでの幼児の姿を認めることで、幼児にとって豊かな経験となる。
  - ・ヤゴが羽化する前に死んでしまったことは、幼児にとって悲しい出来事であった。しかし、死んでしまったからこそ、友達と悲しい気持ちを共有したり、なぜ死んでしまったのか考えたりする姿につながった。思うようにならない経験だったからこそ、幼児の豊かな経験となった。